医師が少ない、高齢化が進んでいる、医療崩壊寸前だ、とよく言われる。ただ、そうした厳しい状況でも、奮闘し、より良い医療、介護を実践している医療関係者が、いわきには何千人といるということもまた事実だ。コロナ禍でも、医療崩壊せずに踏みとどまった。その現場は、医を志す若者たちにとっては、現場の人たちの思いを聞き、やりがいや学びに触れる時間になる。

現場で奮闘する人たち、奮闘する人たちが全力で動く場、そのネットワーク。いわきの医を支えている「現場／ローカル」にこそ、まだ見ぬ宝物が転がっている。いや、それは医療にとどまらず、福祉や介護、まちづくり、さらには震災復興といった文脈まで広く捉えたとき、さらに光り輝くものになっていくはずだ。その人が、その人らしく、自分が選んだ地域で、だれかに支えられ、自分もまただれかを支え、最期の瞬間まで暮らし続けていくことができるまち。そんな地域のあり方を学ぶための「現場」が、私たちの知らないいわきの、そこかしこに転がっているように思えてならない。地域医療セミナーに臨む学生たちの目や姿勢、そして言葉が、それを物語っていた。

私たちは「医大３年生」というタイミングでの学びを大事に考えています。「人を診る」ことの重要性を「チームいわき」で伝えていきます

＼ ここでは紹介しきれないので、ぜひサイトをのぞいてみてください！ ／

WEB サイト **https://iwakinoiryo.com**

学びのるつぼ　いわき

今回は、医大生３年生の皆さんがいわきの地域医療の現場を肌で感じ学ぶ「いわき地域医療セミナー」を特集しました。「これがチームいわきだ」と内外に胸をはれる多様な研修先とプログラム。急性期、ケア、最先端の医療機器、人を診る、高齢や障がいなど。一つの医療機関では体験することのできない多様な学びのプログラムは、いわきの地域医療を支える多くの方々の情熱の賜物。いわきは「学びと情熱のるつぼ」なんです。

Special Thanks To
いわき市医療センター、福島労災病院、常磐病院、かしま病院、福島整肢療護園、いわき市医師会、いわき市病院協議会、かしま荘、楢葉ときわ苑、やました福寿苑、ツクイ内郷、グループホームかしま

いわきの地域医療

SNS

いわきの医

Follow Us!!!

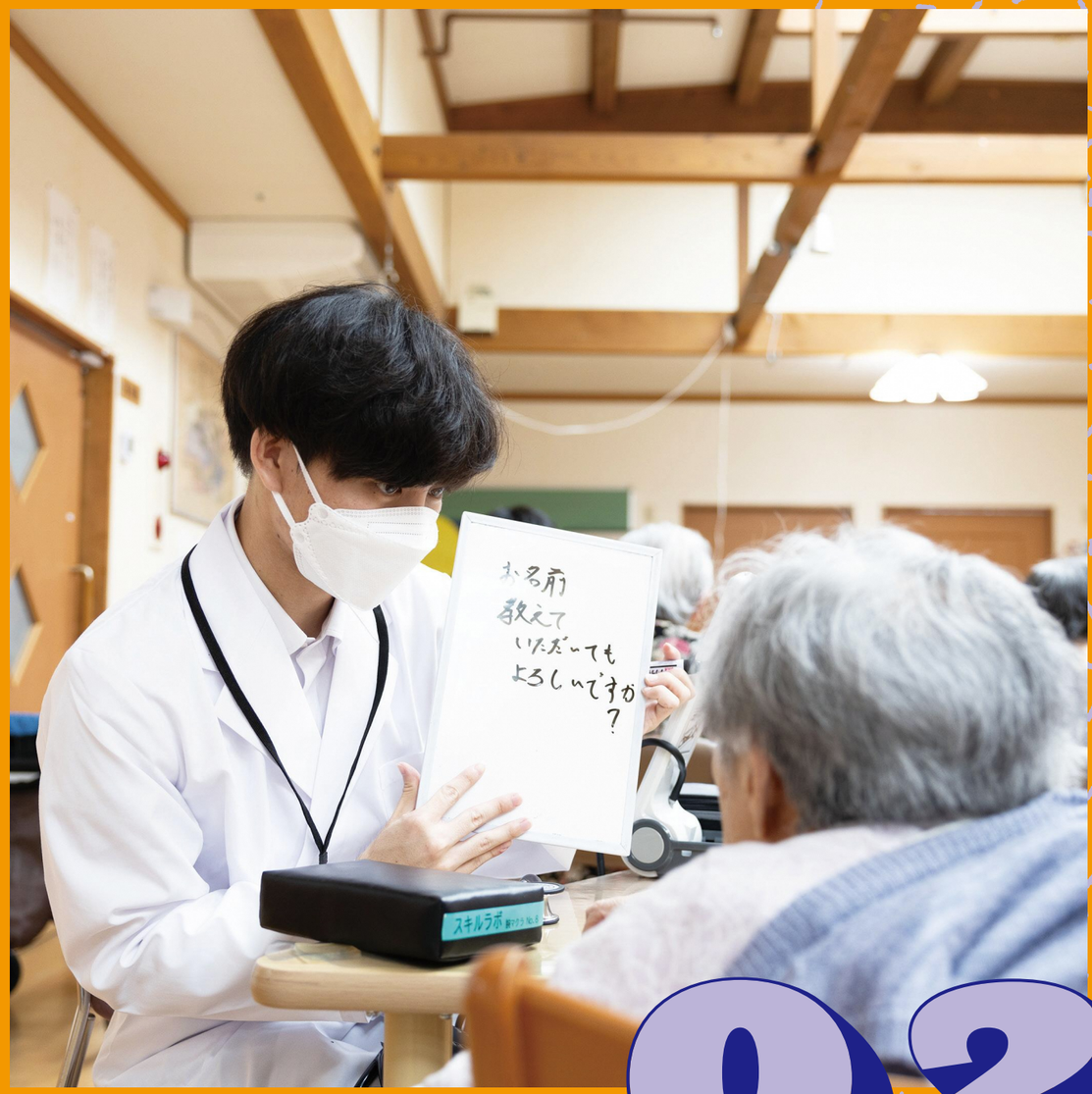
発行／問い合わせ　いわき市地域医療課

TAKE FREE

いわきの地域医療

HOT! FUN! IWAKI!

MIRAIの医療ZINE（人）



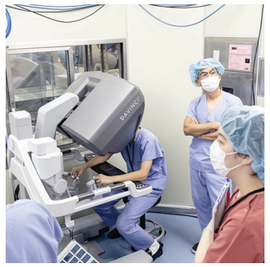
02

特集　**医学生たちの学びから、いわきの魅力を編み直す**

医学生たちの学びから、いわきの魅力を編み直す

いわきの医療の課題をできるだけ「ポジティブに」転換しようとするとき、キーワードとなるのが「学び」だ。課題に立ち向かっている現場には、さまざまなリソースやネットワークが蓄積されている。それは、医療を学ぶ人たちにとって、かけがえのない体験になるはず。そんな思いから、現場に広がる豊かな学びを提供しようと、いわき市地域医療課と福島県立医科大学が連携した、地域医療セミナーが開催されている。

文＝小松理虔　写真＝鈴木宇宙／熊田誠



常磐病院ではアロハ姿の新村院長の講話と最新の手術支援ロボットを体験

現場で感じとる、いわきの「医」

いわき地域医療セミナーは、今年８月から９月にかけて合計３回、それぞれ２泊３日の日程で開催された。福島県立医科大学の学生たちが、いわき市内の病院や施設をめぐり、現場の医師から話を聞いたり、患者さんや利用者さんと交流したり、まち歩きをしたりと、対話を重ねながら学びを深める内容になっている。今回は、９月２７日から２９日まで行われた「第３回」をフィーチャーして、学生たちの学びにフォーカスしていこう。

いわき市医療センターでは、新谷病院事業管理者とともに手術を見学。また、救命救急センターの現場や相澤院長の講話など急性期病院の空気を肌で感じた

学生たちがまず向かったのは、いわき市常磐にある、ときわ会常磐病院。簡単なオリエンテーションのあと、実際の外科手術を見学。みんな少し緊張した面持ちだったが、いずれ立つかもしれない舞台を目の当たりにし、自分たちの志を再確認したようだ。そのあとは、グループに分かれて院内見学。ＣＴ・ＭＲＩ・手術支援ロボット「ダヴィンチ」など先進医療機器がそろった部屋ばかりでなく、透析室など日常的な医療の現場も視察する。学生たちは、その都度、現場の医師や看護師たちともコミュニケーションし、細かにメモを取る。その姿からは、漫然とせずに現場から少しでも学び取っていくんだという意欲が感じられた。

その後、新村浩明院長がアロハで登場。これまでのキャリアや医師としての哲学など、さまざまな話を伺うなかで、これが新村院長流の「地域への寄り添い方」なのだと学生たちも感じたのではないか。先進的な医療機器があっても、医師の向上心や向学心がなければ使いこなせない。そして、その向上心や向学心もまた、地域への思いに支えられている。アロハは、まさにその象徴なのだ。

地域に根差した医療とは

２つのチームに分かれた２日目は、かしま病院と、いわき市医療センターに分かれ、さらなる現場へ学生たちが入っていく。Ａ班のかしまチームは、まずはかしま病院のバックヤードを視察。検査、透析治療、介護、リハビリ、薬剤など各セクションを巡った。地域医療の現場でケアを必要としている人に寄り添うために必要なのが「ホスピタリティ」。数多くの患者さん、利用者さん、そして医療従事者が混ざり合う空間で、学生たちは医療の原点に立ち返ったはずだ。さらに、午後は「いとちワーク」というまち歩きと対話の企画にも参加。鹿島地区に暮らす人たちが、日常的にどのような景色を見て暮らしているのか。鹿島の人たちと地域の結びつきを、歩きながら感じていった。

かしま病院では介護施設で入所者の方と直接向き合い、「人を診る」ことを学ぶ。今号の表紙の写真もその一コマだ。

Ｂ班は、いわき市医療センターへと向かった。救命救急センターをはじめ急性期病院という医療の最先端の現場で働く医師たちの動き、視線、姿勢。教科書では学ぶことのできない「息づかい」や「空気感」を感じるだけでも、学生たちにとっては大きな刺激になったことだろう。医療センター見学のあと、学生たちはさらに福島整肢療護園に向かった。病気を治すだけではない、「ケア」という医療の最前線で、学生たちは、自分たちが考えている以上に、「医」の領域が広いことを感じ取ったのではないだろうか。

見学する病院の規模や役割は異なり、施設も高齢の方と障がいのある方向けと様々な支援拠点を肌で感じることになる。現場で働く人たちとの対話の機会も時間もたっぷり設けられた。学生たちにとっては、次々に浴びせかけられる現場の空気感や言葉に頭を働かせつつも、自分たちも言葉にしていかなければならない。知恵熱が出るような、そんな体験になったのではないだろうか。

３日目の振り返りワークショップで印象的な言葉をいくつか紹介する。

「地域医療というと、『へき地医療』をこれまではイメージしてきたが、印象が大きく変わった。人と向き合うのが地域医療だ」

福島整肢療護園では障がいのあるご本人とそのご家族から話を伺う機会を持った。研修プログラムの幅の広さが、いわきの特徴だ。

「ひとりの患者さんに向き合うには、看護師や薬剤師、リハビリやケアに関わる人たちと連携する必要がある。チーム医療の方向づけを行う役割があると気づいた」

「人を診る、ということが少しわかってきて、自分の進むべき方向が見えてきた」

「自分自身が楽しみながら地域の人たちと振る舞うこと、地域のことを知ることが何より大事だと学んだ」

参加する学生は、まだ大学３年生。医療の基礎的なことを教科書から学ぶ段階だ。ただ、それが意味するものは一体何なのかということを体験するのは、まだ先のことになる。だからこそ、「専門的な領域に入る前に」地域にどっぷりと浸り、人と向き合い、さまざまなものを受け止めながら、みんなで時間を共有して、それぞれに学びを言葉にしていく時間が大事なのではないだろうか。

裏面につづく

３日目は、「いわき」「地域医療」をキーワードに今回の体験や見学を振り返りながら言語化し、学びを深めていった